

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	二人の学者の訃 <一般>
Author(s)	関本, 至
Citation	広大言語 , 11 : 33 - 35
Issue Date	1971-12-06
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046374">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046374</a>
Right	
Relation	



# 一 般

## 二人の学者の訃

関 本 至

Mirambel教授

1967年11月19日の夕刻、パリはセーヌ河左岸 ヴォルテール河岸の一筋南にある狭いリル街の東洋語学院 (L'École des Langues Orientales Vivantes) の玄関を私は入った。ミランベル教授に会うためである。

私がミランベル教授の名を知ったのはもう30年以上も前のことで、その頃教授はパリ言語学協会の機関誌BSL (Bulletin de la Société de Linguistique de Paris) に幾篇か現代ギリシア語に関する論文を掲載しておられた。新進の言語学者・現代ギリシア語学者であったわけだ。現代ギリシア語の文法書といえばThumbのそれとPernotのそれが代表的なものとされていた頃で(この2著の優秀さは今日もお変わらない)、ミランベルの論文はその名の快適なひびきとともに何か新鮮な感じを私に与えたものである。第二次大戦と戦後の混沌の中で、辛くも生き残った私が、以前から抱いていた現代ギリシア語への興味をまた新たにかき起したとき、私の念頭にまず浮んだのはMirambelの名であった。今から数えると10幾年も前になろうか、私はミランベル教授に宛て手紙を書き、現代ギリシア語に関する若干の疑問について教示を尋うた。やがて懇切な返書があったとき私はどんなに嬉しかったことか。文通は頻繁ではなかったが、年に一度か二度の当方の質問の手紙に対して教授は必ず適切な返書くれた。私がヨーロッパに出張することになったとき、パリでミランベル教授に会うことが、旅の最大目的の一つであったのは当然である。

10月15日パリについて、それより1ヶ月前に留学生としてパリに来ていたH君に迎えられたとき、まず同君に依頼したのはミランベル教授にパリ到着の挨拶と面会申込みの手紙の草稿を書いてほしいということだった。ローマで下痢つづきで疲労していた上、手許にフランス語の辞書もなし、とても自分でフランス語の手紙を書く勇気はなかったのである。やがてホテル気付でミランベル教授よりの返書が届いた。19日の夕刻5時、東洋語学院に来なさい、というのである。

玄関に入って、教授の部屋の所在をたずね、狭い階段をあがり、細い廊下をつきあたったところに教授の部屋があった。扉を叩くと応答があり、先生は扉のところまで出て来られて、待っていたという風に快く迎え入れてくれた。話は30分くらいだったろうか。持参した拙著「現代ギリシア語文法」の校正刷をお見せしたところ、先生は「日本語が読めなくて残念だ」と言われながら2、3の意見を述べて下さり、手許にあった御自身の論文の抜刷のいくつかを下さった。話の中で「自分もともと言語学の専攻だが、いつの間にか現代ギリシア語の細道に迷いこんでしまったようだ」という意味のことを言って、一種の苦笑をもらされた——私自身も(もちろんミランベル教授とは比

較にもならないが)似たような気持をもっていたので、ある種の共感を感じたのである。

Mirambel教授は、ずっとバリ言語<sup>やあを</sup>の有力メンバーの1人であって、BSL, RES1, Byz Z, Glottaその他の雑誌につきつぎと興味ある論文を発表し、現代ギリシア語の文法書、辞書、研究書、また小説選集の編著などもされ、文字通り現代ギリシア語学の最高峰に立っておられた。

帰国後も引きつゞき年に1, 2回の文通はあり、クリスマスカードの交換もあったのだが、昨年のクリスマスには何の便りも来なかった。多少いぶかしい気持もあったところへ、1月の下旬であったか、ミランベル夫人より教授の計が届いたのである。夫人自筆の手紙は

“Madame Mirambel a la grande douleur d'informer M<sup>r</sup> Sekimoto que son mari, M<sup>r</sup> Mirambel est mort le 4 Juin 1970, des suites <sup>d'un</sup> cancer du foie.”

という書き出しである。肝臓癌で! 私は手紙を手にしたまま、しばらく呆然としていた。悲しいというのか、惜しいというのか、とにかく哀惜の思いにたえなかった。夫人の手紙には、教授の後継者はTarabout教授であって、教授はかねてから私の名をこの人にも伝えていたから、研究上のことで必要があったら連絡するがよからう、との親切な言葉がつづいている。

目を閉じると、くすんだ東洋語学院の中の秋の暮れ方のうす暗いミランベル教授の室が眼底に彷彿と浮んでくる。会ったといってもただの1度、それもほんの短い時間ではあったが、その重厚な、しかもえらぶらない、そして温い面ざしの印象は、教授生前の数々の好意とともに私にとって終生忘れられぬものとなるであろう。

Eckardt教授

2年以上も前になる。黒枠の封筒がドイツから届いた。

“Mitten aus der Arbeit, die er so sehr liebte, wurde mein lieber Mann, unser geliebter Vater, HANS ECKARDT, Dr. Phil. Bungaku Hakushi, Professor an der Universität Berlin, im Alter von 63 Jahren aus dem Leben gerissen.”

えっ! と私は声をあげた。エックルトさんが亡くなった! ベルリンで会ったあの元気そうだったエツカルト教授が!

フランスからドイツに行き、ベルリンを訪れた私は、印欧語研究室やビザンチン研究室(ここには比較的新しくつくられた現代ギリシア語研究部門があるが、その蔵書は大したものではなく、その乏しさがかえってまた私に親近感を与えてくれた)、そして東アジア研究室などを訪問した。これら3つの研究室は大学の本部キャンパスから少し離れたところにあつて、一見、やや大きい民家のような建物であつた。(東アジア研究所と言っても、私が訪ねたのは日本研究室で、中国のは別に大分離れたところにあるということである。)なぜ日本研究室などを訪れることになったか、そのいきさつは省くが、建物の階下には所長のエックルト教授の部屋があり、2階に書庫や講義室などがあつて、1階にも2階にも日本の図書が充満していた。はじめ1時間ほどおぼつかないドイツ語

で話をしたのだが、ちょっと用事で部屋を出られたエックルトさんは、再び部屋に入って来るやいなや「やあ、センセイ、お待たせしましたね」と、いとも流暢な日本語で話しかけられ、これには全くびっくりさせられてしまった。その美事な日本語に比べて、さきほどの私のドイツ語は全く冷汗もの、人が悪いなあと思ったほどである。

エックルトさんは長く日本にいて、旧制福岡高校のドイツ語講師で、また京都の日独協会の館長(?)もし、西田直二郎博士について、日本文化史を研究して京大で文学博士の学位を授与されたというようなことなどをいろいろと話された。日本語が巧みなはずである。

そのあと8時から9時すぎまでのコロキウムを傍聴させてもらった。1人の~~男~~<sup>男</sup>を生やした学生(今でこそ珍しくはないが、4年前には日本ではヒゲ学生は少なかった)が、江戸時代の思想史について研究発表をし、それがすむとエックルトさんが批評を加えるという形でおこなわれた。(女子学生がさかんにタバコを吸いながら聞いているのもやや奇異な感じがした。)それから秘書の女性と一緒に街へ出て免料理のご馳走になったのである。

帰国してから2、3度手紙のやりとりがあった。「そのうち日本に行きたい。そして、Maguro-toroが食べたい」との便りもあった。1969年1月20日附の手紙(実はそれが博士からの最後の通信となる)には、ベルリン大学における die studentische Revolution のことが記されてあった。「それは東京でと同じ形をとっています」とあって、あきらかに東大安田講堂の報道を見た直後に書かれたものである。そして「今年には日本に行く予定だ、再会をたのしみにしている」と記されてあった。

それからわずか1ヶ月余り後の2月26日エックルトさんは他界されたのだ——書斎で、仕事をしながら。ゆくりなく、ただ一晩、異郷であっただけのあの磊落なエックルトさんの笑顔と、そして老人斑がいくつも浮いていたその手が、今でもあざやかに思い出される。今一度日本で会いたかったのに——マグロのトロをご馳走してあげたかったのに。

× × × ×

わずか3ヶ月のヨーロッパの旅で、そう沢山の学者に会ったわけでもないのに、その中のとくに印象深かった人のうち2人までもが、この4年たらずの間に他界してしまったとは——自分の手にも老人性のしみらしきものがあらわれはじめたのを眺めながら、あれこれの感慨にふけりつつ、この回想を綴る。